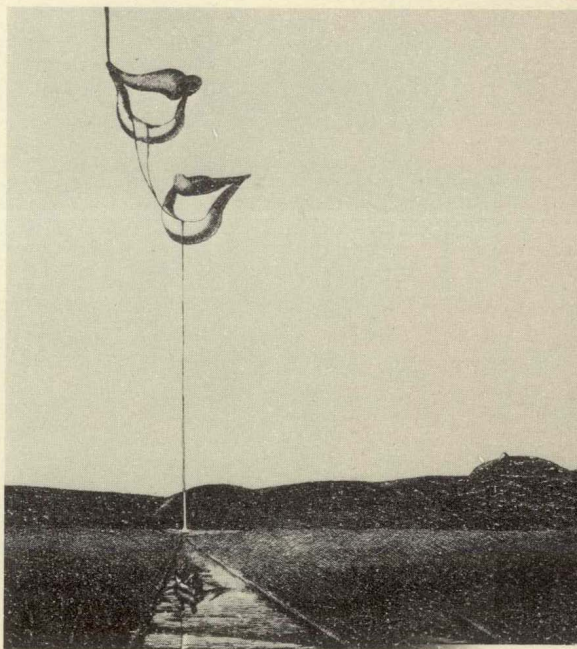


小野十三郎詩集

牧 羊 子 編



〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉

© 1974

世界の詩 66

小野十三郎詩集

昭和49年4月15日 初版発行

著 者 小 野 十 三 郎

発 行 者 津 曲 篤 子

印 刷 者 岡 橋 清 治

発 行 所 株式会社
彌 生 書 房

162 東京都新宿区中町18番地
電話・東京(260)3707(代表)
振替口座・東京97315番

0392-74030-8525

小野十三郎詩集

牧羊子編

彌生書房

表紙装画
浜田知明

小野十三郎詩集
目次

半分開いた窓

盗む

野の楽隊

或恐怖

野鴨

断崖

古き世界の上に

鋺と鋏

留守

軍馬への慰問

燦然たる飾電燈の下で

泣きむし

機関車に

大阪

葦の地方

住吉川

明日

風景詩抄

北港海岸
冬の夜の詩

大葦原の歌

風景(四)

風景(五)

硫酸の甕

人造石油工場一つ

山

重工業抄

北西の葦原

風景(八)

黄昏の地平

禾本莎草

渺かに遠く

私の人工楽園

自然嫌い

今日の羊齒

葦の地方(四)

二九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九

三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四

重油富士

重油富士

野の夜

機械化遊戯機具群の中

木は一せいに夏に向ってなびく

ハマスゲのたぶさ

木々が芽吹くとき

高いところ

とほうもないねがい

りんごの血

土民の手

たばこの火

異郷

シェーラの山

奥の細道

工作者の旅

鬼あざみ

そんなに遠くはない

垂直旅行

昆明の夕だち

消えた村

キリン草への唄

黄金虫

ケニヤよりも遠く

旅と滞在

ESSO のガソリンスタンド

雀

二五

二七

二二

二六

二三

二六

二六

二六

二六

二三

解説

牧羊子

二五

六

一〇〇

一〇三

一〇五

小野十三郎詩集

半分開いた窓

盗む

街道沿の畑の中で

葉鶏頭を盗もうと思った

葉鶏頭はたやすくもへし折られた

ぼきりとまことに気持のいい音とともに

——そしてしずかな貞淑な秋の陽がみちていた

盗人奴！ とどなるものもない

ぼくはむしろその声が聞きたかったのだ

もしそのとき誰かが叫んでくれたら

ぼくはどんなに滑稽に愉快に

頭に葉鶏頭をふりかざして

晩秋の一条街道をかけ出すことが出来ただろう

しかしあまりたやすく平凡に暢気に

当然すぎる位つまらなく盗んだ葉鶏頭を

ぼくはいま無造作に
この橋の上からなげすてるだろう

野の楽隊

ケームリモミエズ……………クモモナク
太鼓ばかりいやにひびかせて
四五人の赤い楽隊が街道をゆく
はしゃいだ小供や犬なんかもいく
街道に沿うた細いあぜみちでは
カーキの軍服をてらてらさした在郷軍人が
口笛で合奏しながら歩いていく
少し離れた丘の草路をふんでいくのは
ぼくだ
くすくす笑っているぼくだ
あの楽隊を聞いていると
なんだかなまあたかな情熱が
胸もとにぞくぞくはいあがつてきて
くすくすたくなる

ぼくはいよいよ笑いだした
ぼくは自分をどなりつけた

しかしぼくの歩調は

あの太鼓の歌にあっている

いくら乱そうと乱そうとしても

いくらもがいてももがいても太鼓につりこまれる

ぼくはついにたまらなくなつて鬼のように

黄色い草むらにもぐりこんで

長い耳をたたんだ

そしてまたこんどは

ガラガラと笑いを吐きだした。

9 或恐怖

いくら行つても行つても赤い蘆である

こんな路をゆくのはよくない

陽も落ちそうに弱りました

こんな路をゆくのはよくない

陽も赤けりや路も赤い

ぼくの背中にはむずがゆい
みんなが熱病のように赤い
頭脳も赤い
頭脳も赤い
呼吸も赤い
嫌な赤さだ
赤いものは赤い
赤いものは赤い
笑っても赤い
こんな路をゆくのはよくない
赤けりや赤くなれ
赤けりや赤くなれ

野 鴨

僕はあの蘆間から
水上の野鴨を覗う眼が好きだ
きやつ眼が好きだ
片方の眼をほとんどじて

右の腕をウンとつっぱって

引金にからみついた白い指尖をかすかにふるわして

それから蘆の葉にそつと触れる

斜につき出た細い銃身

あいつの黒い眼も好きだ

僕はあの赤い野鴨も好きだ

やつの眼ときてはすてきなもの

そして僕は空の眼が好きだ

あの冷たい凝視が

野鴨を悲しむのか

僕は僕の眼を憎む

この涙ぐんだ僕の眼だけを憎む

覗く眼 銃口の眼 鴨の眼 空の眼が

静かに集い

鳴を射つ

断崖

断崖の無い風景ほど退屈なものはない

僕は生活に断崖を要求する

僕の眼は樹木や丘や水には飽きつぽい

だが断崖には疲れない

断崖はあの 空 空からすべりおちたのだ

断崖

かつて彼等はそれを見て昏倒した

僕は 今

断崖の無い風景に窒息する

古き世界の上に

鍔と鋏

「××××が生前使ってたものだ」

そう言って仲間は手にしていたものを畳の上に並べた

それは古風な鍔と鋏であった

鍔は赤く錆びつき、異様に大きい鋏は手垢で黒く光っていた。

俺は今さらのように彼が女であったことを想い出した

ここにも彼女が一生を懸けて苦しみ戦ってきた路があった

叛逆児××フミが女性であったと言うことは必ずしも偶然ではなかったのだ

錆びた鍔を持ちあげてしずかに置いた。